

伝統的琉球民家の主屋南側の縁側空間の持続と変容の特徴について

日大生産工(院) ○清水 杏 日大生産工 篠崎 健一
東京工業大学 藤井 晴行

1. 研究の背景と目的

本稿は、伝統的琉球民家の主屋南側の縁側に着目し、改修による物理的変化や居住者による使い方の変化を分析し、縁側空間の伝統性の持続と変容について考察することを目的とする。

伝統的琉球民家の特徴の一つとされる雨端は、深い軒下の半外部空間である（Fig.1）。雨端で営まれる日常生活は、琉球地方の民家における伝統的な住まい方を特徴づけており、民家の住環境を調整し、人の来訪の場となっている。縁側は、雨端空間の中の一部であり、一番座、二番座、三番座の座敷に接する。一番座は床の間のある客を迎える格式の高い室とされ、二番座は仏壇（位牌を祀る棚）があり祖先を祀る場とされる。三番座は日常的な団欒などが行われ、それぞれの座敷の性格は異なる。以下、雨戸より内側の部分を「縁側」、雨戸より外側の部分を「濡縁」と呼ぶ。

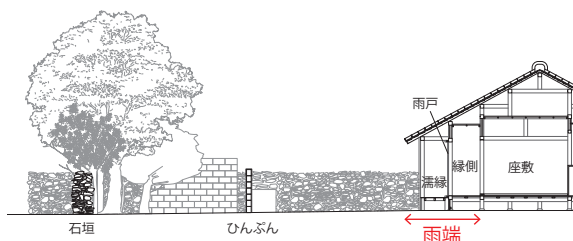


Fig. 1 伝統的琉球民家の雨端空間

2. 研究方法

研究対象は、沖縄県の伊是名集落である。調査研究では、2014年9月から2019年11月までに伊是名集落の後辺（くしひん）地区を中心に、全民家160軒中66軒の実測調査と聞き取り調査を行い、2020年3月に調査結果を報告書としてまとめている¹⁾。調査に基づく基礎資料は、①実測図（住居の現在の状態）、②テキスト化した会話記録、③（①②から）合理的に推論される住居の過去の状態（図面）、④改修部位ごとの変化シート（①～③より作成）である。変化シートには、過去の状態（③）と変化した状態（現在または現在に至る途中の状

態）（①）、その改修に関する聞き取りの語りのテキスト（②）を記す。

本稿は、資料が充実する25軒の民家を対象とする。縁側空間に関する変化シートをもとに、一番座、二番座、三番座それぞれに接する縁側空間の改修内容と関連する語りを整理し、座敷に接する縁側空間の改修内容ごとに適用数を数え、表にする。改修内容の適用は重複し数え、調査民家数^{*1}で除して、その改修内容の適用される頻度を比較する。

3. 分析と考察

3.1. 代表的な9つの改修項目

座敷別の改修内容と語りから、（A）～（H）の9つの縁側空間における改修項目が得られる。その後、座敷別に9つの改修項目の適用数を表にまとめる（表1）。

表1 座敷別の改修項目の適用数

	一番座	二番座	三番座
(A) 縁側を設置する	6	2	2
(B) 濡縁を設置する	6	7	4
(C) 部屋を拡張する	3		5
(D) 部屋を新設する	3		1
(E) 畳を敷く	5	8	
(F) 収納をつくる	11		
(G) 土間をつくる		3	3
(H) 玄関をつくる			7
(I) 変化なし	4	6	3
合計件数	38	26	25

3.2. 縁側空間の改修の特徴

語りと改修の適用数から、縁側空間の改修の特徴を3つ得ることができる。

1つ目の特徴として、一番座に接する縁側は部屋や収納を設置するような内部化する改修が多いと考えられる。一番座前は、（A）縁側を設置する、（D）部屋を新設する、（F）収納をつくる改修の件数が二番座・三番座に比べ多い（表1）。また、「みんな来る時は、一番座から三番座まで縁側にも並んで寝ていた。」や「道具がいつ

*1) 伊是名集落において、一番座・二番座がある民家は25軒、三番座がある民家は22軒である。

ばいあって(収納が)いくらあっても足りない。」という語りを得ている。家族構成の変化によって一番座が寝室として利用されるようになり、一番座は内部空間の拡張をしやすい位置にあることや改修前の民家は収納が少ないことから、収納や部屋を設置する民家が多い。したがって、一番座に接する縁側は、内部化欲求が高く、一番座の格式や外部との関係は持続されるより変容していると考えられる。

2つ目の特徴として、二番座に接する縁側は大きな改修が行われない場合が多いと考えられる。二番座前は、(I)変化なしの件数が6件であり、一番座・三番座よりもが多いことがわかる。さらに、床面のみの改修が多く、(C)、(D)、(F)、(H)のような空間そのものを変容させる改修は見られず、(B)濡縁を設置するや(E)畳を敷くのような既存の縁側を活かす改修が多い(表1)。また、「こちらでお茶を飲んだり、出せるようにしたい。」や「お客さんが多かったので、縁側にも畳を敷いた。」という語りを得ていることから、二番座前は誰もが入りやすく多くの人を招くことができるように広く開放的な空間としたいという居住者の意識が改修に結びついている。したがって、二番座に接する縁側は、祭事や風習^{*2}が関係し、内外の接点としての重要性があり、伝統性が持続されていると考えられる。

3つ目の特徴として、三番座に接する縁側は土間や玄関を設置する改修が多いと考えられる。三番座前は、(H)の改修が7件みられる。(E)畳を敷くや(F)収納をつくるような空間

そのものを変えない改修はみられず、それ以外の改修が多くみられる(表1)。また、「靴とか置くところがないと台風や雨が降る時に困る。」や「二番座には仏壇があるので、玄関を二番座前につくるわけにはいかない。」という語りを得ている。

したがって、三番座に接する縁側は、一番座・二番座のような格式や風習などの制約がないため改修されやすく、外部との接点として認識されていると考えられる。

4. まとめ

民家の縁側空間に関する改修内容と語りをもとに、一番座、二番座、三番座それぞれに接する縁側空間の改修による変容の特徴について整理した。住意識や座敷の性格、位置に応じて、それぞれ特徴のある改修がされていることが明らかになった(Fig.2)。

謝辞

伊是名集落における研究は、東京工業大学藤井晴行研究室と日本大学篠崎健一研究室が共同で行っている。伊是名集落の皆様とこれまでの両研究室で調査研究にあたった関係者の方々に謝意を表する。

参考文献

- 1) 篠崎健一、藤井晴行ほか：沖縄県伊是名集落調査まとめ
- 2) 福田奎也、篠崎健一、藤井晴行：民家の南側空間で行われる祭事と風習 伊是名集落後継伝統的民家の実測調査に基づく探究その4、日本建築学会大会、学術講演概要集、5512、p.1079-1080、2017

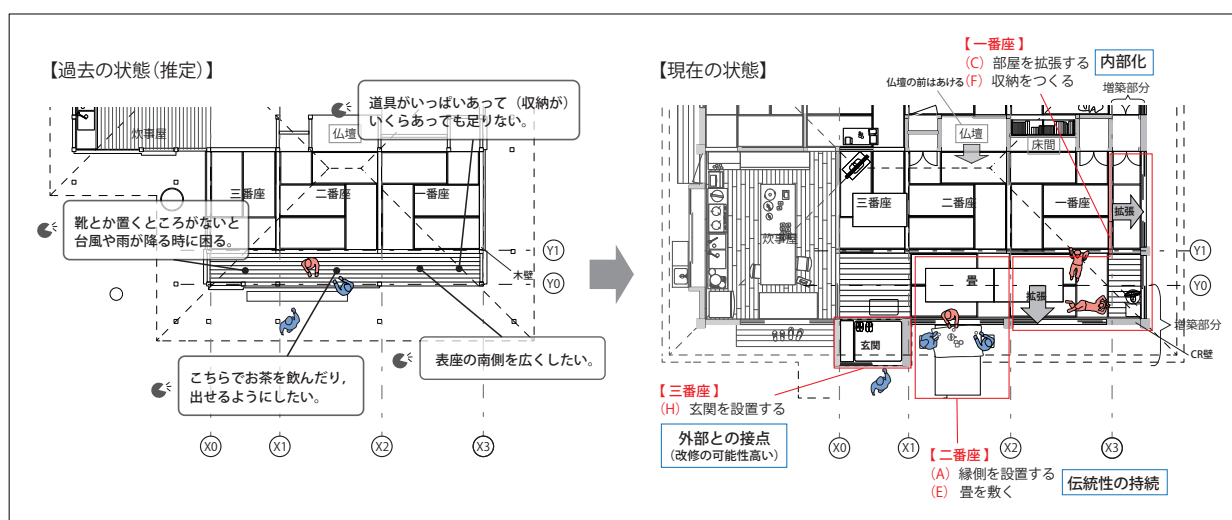


Fig. 2 主屋南側の縁側空間の変容の特徴

*2) 二番座の縁側や濡縁に茶盆を置いて通りかかった人など誰彼問わず茶や茶菓子をもてなす「イヒジャチューター」と呼ばれる風習がある。また、伊是名集落で今もなお行われている風習である²⁾。